

特集

生み出す気持ち。

Oos

MAGAZINE EPISODE.3

地域と出会った学生の人

中央大学法学部 (卒業)

Kaniko Manato

神子真人

卒業おめでとう



風の人と、土の人。風の方は、その地域の外から関わる人のことで、まさしく学生はその存在。土の方は、その地域に根ざして暮らしている人で、風の方が持ち込んだアイデアやパワーを実際に形にしていける力を担います。この両者の融合が地域を元気にしますが、全国でも有数のキャンパスストリートである茗荷谷界隈は、まさに学生の宝庫。この地に春風のごとく現れ、地域に笑顔と元気を巻き起こしてくれた神子真人さんに、文京区での学生生活を振り返ってもらいました。

中

央三銃士。

2025年10月、Oosのトークイベント「街を元

気に! でんでん太鼓と学生たちの挑戦」にて登場していた「でんでん太鼓」店主の清水大介さんから、加藤大晴、入江俊介とともにそう呼ばれている。私は中央大学の茗荷谷キャンパスに通っていた間、同じ大学に通うこの親友2人と一緒に、文京区の町内会で餅



加藤大晴
中央大学法学部卒。野球小僧。料理が得意ということで、スペシャリストになるべく各イベントの台所を任せられる。文京思い出横丁では飲食を統括し MVP に。2026 年度からは食品メーカーに勤務。(清水大介さん評、3人とも)



入江俊介
中央大学法学部卒。奈良県民寮寮長。仲間思い、チームワークの要。気遣いもある。町会の餅つきで得たノウハウで寮の近隣の餅つきでも活躍。文京思い出横丁では寮のメンバーとた焼き屋で活躍。2026 年度からは郷里へ。

つきをしたり、御神輿を担いだり、傳通院で開催される「文京思い出横丁」の運営に参加したりと、気づけばどっぷりと地域活動に浸かる日々を送っていた。トークイベントでも話題になった「なぜ地域活動がやりたくなるのか」を振り返っていきいたい。

地域参加の動機

私が最初に地域活動に足を踏み入れたのは、純粹なボランティア精神からきたわけではなかった。中央大学の学園祭である「白門祭」の実行委員を務めている身として、「どうすれば地域の人にもっと来場してもらえるか」町内会の掲示板に学祭のビラを貼らせてもらえないかと、戦略的かつ打算的な思惑の方が大きかった。



白門祭実行委員として参加した、大塚町町の餅つき。2024年1月



「mTALK VOL.11 街を元気に! でんでん太鼓と学生たちの挑戦」出演: 清水大介 (居酒屋でんでん太鼓) 2025.10.24 参加した学生達も活発に発言した。加藤さんは「何でも経験させてもらえて、地域活動の楽しさが分かった」。

その第一歩として参加したのが、大塚町町の餅つき大会であった。

餅つきで出会った土の人

だが、そこで響いた「よいしょー!」という掛け声の中に、今後一生続くであろう出会いがあった。偶然参加されていた清水さんから「今度、文京思い出横丁にも来ない?」と誘われたのである。私は清水さんのフットワークの軽さに圧倒されつつも、地域活動のイロハも知らない私に新しい活路を見出してくれるのかと期待し、付いていくことにした。

そして、文京思い出横丁の運営と同時に、清水さんが所属する大塚上辻町会での活動にも参加することになっ



神子真人
中央大学法学部卒。白門祭実行委員として、地域活動に幅広く参加。持ち前の明るさ、声のでかさで、各方面にインパクトを残す。文京思い出横丁で盆踊りを担当し、東大盆踊りチームとともに大いに盛り上げる。2026 年度からはメディア関係に勤務。



竹取り



上辻町会の餅つき

た。町内会活動と考えると、想像以上にエネルギーシユである。八王子の山まで竹を切り出しに行き、その竹で流しそうめんを設営する。御神輿の担ぎ方を一から叩き込まれる。そんな活動の拠点となったのが、清水さんが切り盛りする居酒屋「でんでん太鼓」だ。清水さんの店に行けば、人生の教訓や人との付き合い方を教えてくれる、近所のおじさんたちが待ち構えている。

世代の価値観を肌で感じながらの学び

ある時、「天浴場で体を拭かずに脱衣所へ上がる若者をどう思うか」と問われたことがあった。私は「そういう人もいるんだ」と思いつつ、「育った環境や経験の差かもしれない」と自分の考えを伝えた。

正直、合っているかは分からない。しかし、こうした対話の一つひとつが、



学生達が担ぐ町会神輿



文京思い出横丁: NPO 法人文京 BASE が主催する、毎年傳通院で開催される夏祭。文京区の人々が「この指とまれ」で集まり、仲間=コミュニティとなって地域課題の解決につなげていくお祭り、学生達も企画から参加している。



イコト! SDGs!!



地域の恒例行事となった一中祭

Interview

君は、いっ ちゅう さい一中祭を見たか！



文京思い出横丁の盆踊り。大学の盆踊りサークルや放送研究会と連携し、地域のこどもたちの思い出に残る盆踊りを実施した。

異なる世代の価値観を肌で感じる貴重な学びとなっていた。

文京区での経験

そして、町内会での活動を通じて「当たり前」をこなす機会にも恵まれた。

焼きそばブースを任さ

れた時は、材料の調達から調理まで一貫して自分たちの力でやり遂げた。文京思い出横丁で出合い、今では白門祭でも企画するまでになった盆踊りも、私が披露できる特技の習得へと繋がっている。人も学びも、この環境が与えてくれたものである。

竹を運ぶのも、餅つきも、なかなかやろうと思えるきっかけがないと参加することができない。その機会を提供してくれる清水さんがいたからこそ、これだけの経験を送ることができた。上辻町会では、竹を切った後に「大黒湯」という地元の銭湯に浸かるわけだが、それが私の「銭湯ブーム」の火付け役になった。今では友人と他の地域密着の銭湯に出かけることもある。

自分にとっての故郷とは

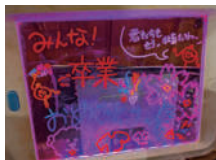
大塚や茗荷谷、そして文京思い出横丁の人々は、驚くほど懐が深い。「また来てよ」「お前がいてくれて良かった」。新参者の学生に過ぎない私に対して、彼らが投げかけてくれる言葉に、何度救われたか分からない。誰かのために何かをしたい。そう素直に思わせてくれるのは、この街が私をありのままに受け入れ、人生に必要なことを惜しみなく与えてくれたからである。今春から社会人となる身として、今では離れるのが寂しい場所に変わっている。



白門祭での盆踊り。この日は「頑張っている神子を盛り上げよう!」と、地域から大勢の大人達も駆けつけて踊り狂った。



2026年3月27日。上辻町会が企画した、卒業を祝う会。文京区を旅立つ学生達の前途を祝して、でんでん太鼓は、激励の言葉と笑顔と涙で溢れた。



地域コーディネーター（小日向）

Sorinachi Hidenori

反町英典

「今年の夏は、いつやるのかなあ」と、心待ちにする人が増えて、すっかり地域に根付いた一中祭。昔は当たり前にあった学校グラウンドでの盆踊り大会を地域に復活させた人がいる。一中祭の仕掛け人の1人、反町英典さんに話を聞きました。

一中祭は、 地域と学校をつなぐ舞台です

娘が中学生の時に、初めて自分が会長として一中PTAに関わって、公立学校というものが地域のいろんな人に支えられているんだと知ったことと、一中の地域協働本部のメンバーになって、メンバーと「地域に何かしたいよね。」と話したのがきっかけです。

自分は、本郷の菊坂に生まれて、実家が酒屋をやっていました。親父が町会活動のずっと裏方をやっているのを

見て育ち、地域のみなさんが、いろんなことをやっているのを知っていたので、現在自分が住んでいる茗荷谷町会でも少しでもお手伝いが出来ればと思っています。

ところが、PTA会長になった当時は、地域と一中とのつながりが薄いなあ、と感じていました。地域のお祭りの時も一中からは各町会さんへ普段のご協力に対するお礼の挨拶をしていなかったもので、PTA役員と相談して、「日頃の学校活動へのご協力に対するお礼をお祭りの時にやろう。」と始め



たのが地域との絆を作る第一歩だったと思います。

根本には、地域の方にとって避難所でもある学校は、地域と学校の間で日頃から良い関係を築けていないと、いざとなった時に、助け合いが生まれないうという思いがありました。地域学校協働本部というのは、地域と学校をつなげる組織なので、その機能を活用したいと考えたのです。

一中祭の始動

私は、上の子が3年生の時にPTA会長を1年間やって、1年空いて、下の子が一中に入ったので、その後3年間PTA会長をやらせてもらいました。PTA会長と並行して地域学校協



反町英典

文京区立第一中学校・小日向台町小学校 地域学校協働本部 地域コーディネーター、大塚青少年健全育成会 副会長、こびなたぼっこ※ 会計。1973年文京区本郷生まれ、小日向在住。真砂小学校、文京二中、東京都立北園高校卒業後、大学で建築(地震工学)を学ぶ。大学3年生の時に阪神淡路大震災が起き、研究調査に赴く。卒論は、熊本の地震ハザードマップを制作した。業務で3・11の支援にも参加し、「何かあった時のために、顔見知りになっている地域の関係づくりが大切である」ことを痛感した。現在、某区役所勤務。自分の出身小中学校が統廃合になっていることもあり、こどもたちの卒業した、小日向台町小学校、文京一中への思い入れは、人一倍強い。



一中卒業生が作画したポスター(2022年)

働本部にも入っていました。

当時、コロナになっていて、何かこども達が輝くことができないかなと考えた時に、運動部は大会があるけど、文化部はあまりないじゃないですか。「そういえば一中グラウンド広いから、盆踊りとかどうですかね。」って、地域学校協働本部で提案して始まったのが、一中祭です。

たまたまその時のPTA副会長が、地域で太鼓を教えている和湧太鼓打会

の方だったので、樽もあるということ、いざやろうと思えばできる土台があったのもラッキーでした。

準備を始めたのは、2021年からで、2022年が第1回、今年は第5回目になります。最初3〜400人もくればいいかなって思っていたのですが、いきなり800人くらいの方が来て下さりビックリでした。で、回を重ねるごとに参加者は増えて、2025年は、なんと1717人にまでとなりました。

町会回りをして一中祭を告知

最初は、何をしていたかわかりませんでした。「団扇があるといいよね。」というところで、地域協働本部で団扇を作りしました。一中の卒業生に声をかけて手作りポスターも作って、近隣の



Oosでの盆踊り練習会。会の前半には、反町さんによる一中祭のプレゼンテーションが行われた。練習では、飛び入り参加の人も盆踊りを楽しんだ。(2023年7月17日)



一中サブアリーナでの盆踊り練習会

盆踊り練習会の実施

2023年には、最初の盆踊り練習会をOosで開催していただき、翌年からは学校で開催しています。最初は、生徒やPTAにまず踊れるようになって欲しいと始めたのですが、次第に地域の人やこども達が集まってくれようになって、町会という括りではない地域の人の踊りを通じた交流の場にもなっているのが嬉しいのです。

持続可能にするための課題

町会さんに声をかけた時に、「人はいねんだよ、うちは」という、声をいただきました。そこで、「中学生や大学生にボランティアをお願いします。で、何人くらい必要か教えて下さい。」



みんなで踊ろう、文京区の夏を楽しもう!



卒業生も活躍する「絆太鼓」



「和湧太鼓打会」の演奏



上町会・大塚町会の有志が、かき氷とポップコーンを出店。一中生と大学生も活躍(2025年)

手応えをつかんだ!

一中祭は、地域のみなさんのニーズに、きれいにはまったのだと思います。盆踊りを「昔は色々なところでやっていたのに、最近するところがないよね。」っていう年配の方や、「盆踊りって楽しいよね。」というファミリー層とか。「一年に一回、ここで会おうぜ!」という一中卒業生の同窓会の場になればなお嬉しいのです。

地域の人が顔を合わせる良い機会だし、一中生が頑張っている姿を見せる機会にもなるし、これだけ大学が密集している地域もないと思いますので。学生たちは本当に頑張っていると思います。こんなに「ボランティア」を一所懸命やろうって思うこと自体、自分の学生時代を思い返すと考えられないですから。それを地域の方に知っても

町会長さんをお願いして、町会掲示板にポスターを貼らせてもらいました。

最初は町会さんには、「イベントの運営にも協力してください。」とは言えませんが、「だんだん協力をお願いしたいよね。」となりました。「町会」って聞くと、加入に二の足を踏むハードルを感じている方も多いかと思うのですが、町会が学校と協働しているとなると、行事にも来やすくなり、町会さんのアピールにもなるのではという思いもありました。

それで、学校、地域協働本部、PTA本部、大塚青少年健全育成会、和湧太鼓打会で構成していた実行委員会に2023年からは、近隣町会さんにお声がけをして、何町会かに入っていたのです。その年は、スーパードールすくい、射的、輪投げなどを出店して協力をしていただきました。

らって、また別の場所でも一緒にやろうって思う関係を繰り返して、継続しながら広がっていった。その先にみなさんが自分達の町の将来を考えるきっかけになればいいなと思っています。

こびなたぼっこ※について

地域活動としては、他に地域の居場所である「こびなたぼっこ※」の運営スタッフをやっています。

文京区の居場所は、けっこう奥まったところにあることが多くて、「こびなたぼっこ※」も同様なので、この場所をもっと多くの人に知ってもらいたいという願いをこめて、「こびなたぼっこ※ではこんなことやっていますよ!」という告知を大塚地域活動センターの公式LINEでも発信しています。

夏祭りに来てみようとか思ってたけど、実際にLINEを見ていたらしゃる方も多いので、嬉しい限りです。



こびなたぼっこ※ コアメンバーの仲間とこびなたぼっこ※では、お茶を飲みながらおしゃべりしたり、好きなことをしたり、どなたでも自由に過ごせます。所在地:小日向1-18-22



Facebook
https://www.facebook.com/kobinatabocco.jp/



大塚地域活動センター公式LINE



親子で楽しむヴァイオリン～ヴァイオリンってなあに?～ 2026.1.18
自分で押さえた指に、プロの音色が響く。

アーティストが まちにやっつて来る

アートスイッチプロジェクト（茗荷谷）
Saito Miki



齋藤実希
文京区生まれ。税理士、MBA（経営管理修士）。東京芸術大学在学中、TBS 主催舞台『フラガール』出演等、多岐にわたる活動を行うなかで、芸術の発展にはビジネスの知識も必要と感じ、税理士資格を取得。アートとビジネスを繋ぐ存在になる事をミッションとしている。

さまざまな施設にアーティストを派遣し、子どもがアートに触れる機会を提供する「アートスイッチプロジェクト」を始動した齋藤実希さん。文京区発のソーシャル・アントレプレナーからの報告です。

アートに触れる機会を提供

皆さん、初めましてこんにちは。私はアートスイッチプロジェクト代表の齋藤実希と申します。私は東京藝術大学卒業後、税理士資格を取得し、本業は税理士をしながら2025年からアートスイッチプロジェクトを開始しました。アートスイッチプロジェクトは、音楽・美術に関わらず様々なアーティストのワークショップを皆さんにお届けするプロジェクトです。

アートスイッチプロジェクトを始めたきっかけは、自分が子育てをする中で、文化体験の選択肢が少ないなと思ったことです。私自身、幼少期はピアノや詩の朗読、休みの日は舞台鑑賞など、多くの文化体験を経験させてもらいました。我が家が特別だったわけではなく、同級生も似たように色々と経験していたように思います。音楽に触れ、絵を描き、舞台の世界に胸を躍らせた記憶は、今でも私の中に豊かな土台として根付いています。

やりたいことを形にしたい

私は文京区出身文京区育ちで、茗荷谷駅は再開発前の街並みの方が馴染みがあります。自身の経験も踏まえ、文京区は文化体験の選択肢が多いと思っていましたし、我が子にも様々な経験をさせてあげたいと思っていました。ところが実際に子育てをしてみると、意外と気軽に参加できる文化体験が少ないと感じました。これは私だけではなく、文京区で子育てをするママ友たちも同様に感じているようでした。一方で、面白いアーティストはたくさんいます。そして、そんな人から何か学びたい、感じたいと思っている人も確かにいる。この二者をつなぐマッチングができれば、関わる人みんながハッピーになれるんじゃないか——そう思ったのが、プロジェクト立ち上げの原点です。

私の長所（短所とも言いますが）に、圧倒的な行動力があります。やりたいと思ったらやらないと気が済まない性分なのです。そんなこんなでアートスイッチプロジェクトを開始して約1年が経ちますが、ありがたいことにすでに多くの企業さまからご依頼をいただいております。

先日Oosで実施させていただいた



ワークショップのヴァイオリンクイズや解体ショーでは、普段なかなか見ることのできないヴァイオリンの中身を観察したり、音の出る仕組みを学んだ。講師は、ヴァイオリニストで、社会教育士、認定ワークショップデザイナーマスターの南條由起さん。



ポップバンド ITAZURA STORE による、本格ライブハウスでのこども向けライブ。クオリティーの高いライブ体験ができる人気のプログラム。



所属アーティストの一人である新里碧さんは、Oosのクラフェス2025で、「ターニングプロジェクト作り」のワークショップを実施。

とを喜んでくださる声でした。私がかつたことが、まさに形になっていくと感じられた瞬間でした。

アートスイッチプロジェクトが 目指すもの

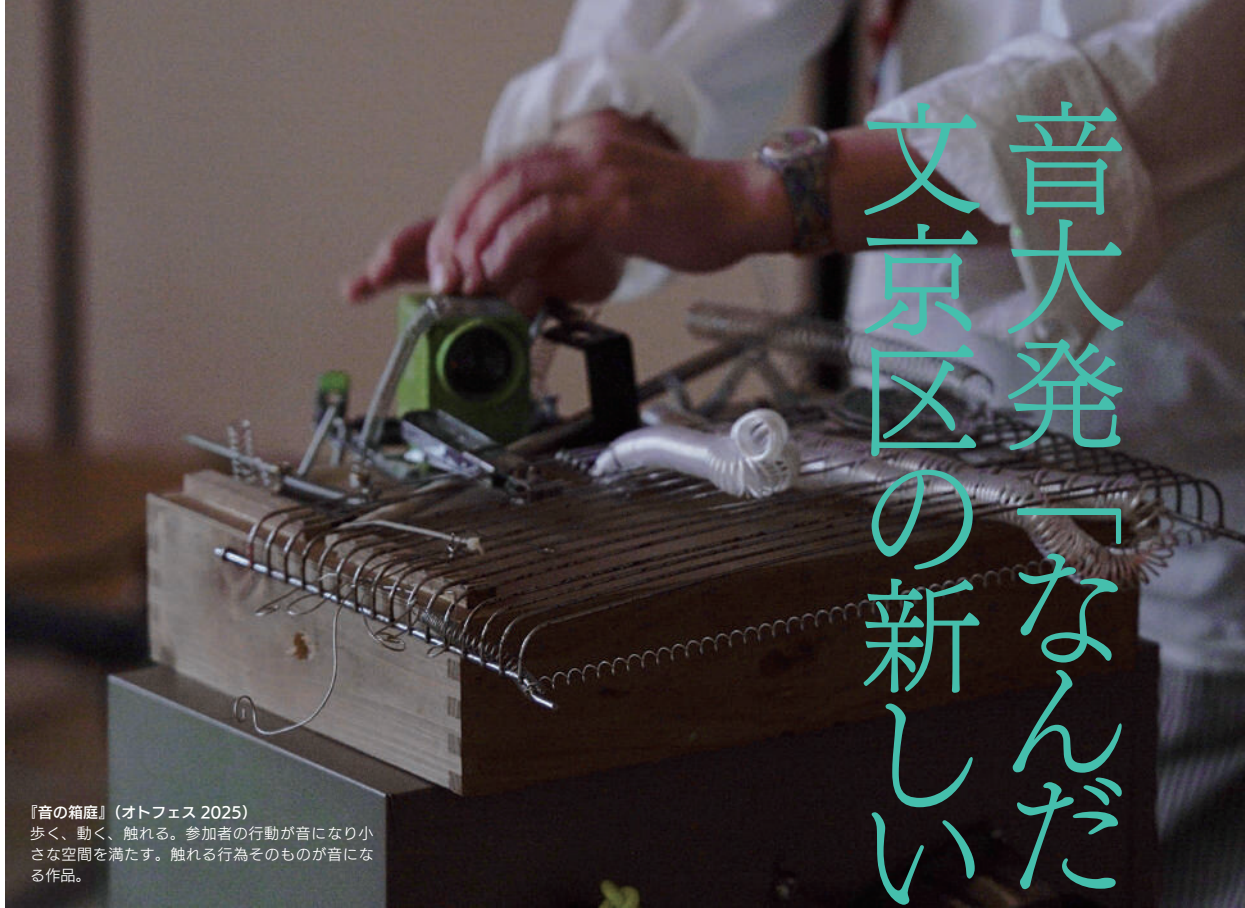
アートスイッチプロジェクトのポリシーとして、技術習得を目的としたプログラム作りはしておりません。それよりも、参加者の皆さんの好奇心や探

究心を広げられるプログラム作りを大切にしています。そのため、我々のワークショップに参加したからといって、すぐに楽器が弾けるようになったり、絵が上手くなったりするわけではありません。ただ、音楽や美術がずっと身近で楽しいものとして感じられるようになる——それが私たちの目指すところです。

また、Oosでのワークショップで我々自身も嬉しい発見がありました。プログラムの中に参加者の皆さんがコミュニケーションをとる時間を設けているのですが、プログラムが終わった後も皆さんが自然とお話しされたり、情報交換をされたりしている姿が見られたのです。我々が提案したプログラムは一方通行のものではなく、参加者さんの間でも双方方向に広がっていくものなのだと、新たな意義と可能性を感じる事ができました。

地域貢献も、私たちが目指すものの一つです。私が生まれ育った文京区という、文化と歴史が息づくこの街で、アートを通じた新しいコミュニティの輪を広げていけたら幸いです。アートスイッチプロジェクトは、これからは皆さまのそばで、日常にアートの「スイッチ」をお届けしてまいります。どうぞよろしくお願いたします。

音大発「なんだこれ!?!」が作る、 文京区の新しい音の風景



『音の箱庭』(オトフェス 2025)
歩く、動く、触れる。参加者の行動が音になり小さな空間を満たす。触れる行為そのものが音になる作品。

音楽家 (大塚)

Umemo Eiri

うめのえり



うめのえり
福岡県出身、大塚在住。東京音楽大学 作曲専攻 専任講師。作曲を小六禮次郎氏らに師事。大学在学時よりキーボーディストとしての活動を開始し、これまで様々なアーティストとの共演やレコーディングに参加。伝統音楽を新たな解釈で実演するバンドで活動する傍ら、無声映画の生伴奏付き上映や街頭紙芝居の上演など、伝統的なスタイルの継承にも精力的に取り組んでいる。銭湯好き。扉頁の銭湯は大黒湯。2026年の目標は文京区の銭湯制覇。

Oosのオトフェスは、音づくりのアーティスト達が集まってワークショップを行う音の祭典です。その空間で、音大生とともに誰も聴いたことのない音の世界を紹介しているうめのえりさんの活動は、音づくりと地域づくりの共鳴を感じさせます。

音大生のポテンシャルとは？

私は、自分自身の音楽活動を続けながら、普段は音楽大学の作曲専攻で教員をしています。音大と聞くと、「ひたすら楽器の練習や音楽の勉強をする場所」と思われるかもしれませんが、確かにその通りで、基本的には大半の時間を音楽に費やしています。しかし近年、音楽の作られ方は劇的に変化しました。みなさんは、音楽制作のAIツールを使ったことはありませんか？

すか？ なかなかすごいんです。一瞬で「おっ、悪くないじゃん！」と思える曲を作ってしまうんです。ここ数年、テクノロジーの進化のスピードに、果たして私たち音楽家はどれだけついていけるのだろうか、よく考えさせられます。これまでのように作曲をしているだけでは、いずれ淘汰されてしまうかもしれない。音大生のポテンシャルをもっと今の時代に合わせて引き出すことはできないか。いつもそんなことを考えています。

音づくりが社会につながる

そんな折、Oosからお声掛けいただき、勤務先の音大生(作曲専攻)数名と一緒に「オトフェス」に参加させていただいています。オトフェスは、単なる「音楽の演奏を聴いて楽しむイベント」ではなく、「参加者自身が音を出すことを楽しむ」企画で、普段の音大生のあり方とは違うアプローチだけれど、なにか新しいことができるチャンスかもしれないと考えました。

2024年に開催したのは、『ドドド・ハンマー』と『浄化の部屋』悪口』という2作品。翌2025年には、『声で遊んでみよう』と、『音の箱庭』を出展しました。作品を言葉にすると、「それって音楽なの?」と思われるかもしれませんが、「なんだかよくわからない」と感じる方もたくさんいらっしゃるでしょう。しかし、2025年のオトフェスで、印象的な出来事がありました。

『音の箱庭』に、視覚に障害のある男の子がお母様と一緒にいらっしやいました。彼は、作者である学生と同好会のメンバーが廃材で作ったさまざまな「発音器具」に触れ、そこから4つのスピーカーを通じてランダムかつ立体的に拡張される音を、本当に自由に、

オトフェス 2024



『ドドド・ハンマー』(オトフェス 2024)
ビジュアルプログラミングソフトの「Max」とスマートフォンを使用した体験型作品。参加者の腕に装着したスマホの位置情報をMaxに送り、ハンマーを振り下ろす動きの方向に合わせて、事前に録音した参加者の声が再生されるという仕組み。



『浄化の部屋』(オトフェス 2024)
少し暗くした和室にほんのり電飾が光る空間を制作。参加者には、これまで言われて傷ついた「悪口」を思い浮かべてもらい、「その言葉そのものではなく、言葉のリズム」で設置された鍵盤を叩いてもらい、そのリズムに乗って「美しい音色」に変換された悪口が部屋中に広がり、やがて消えていく。ある種のカタルシスを味わえる作品。

全身で楽しんでくれていたのです。お母様は盲学校の児童向けの学童施設を運営されているそうで、「ぜひ学童のイベントでもこの展示を実施してもらえないか」とご相談を受けました。「なんだかよくわからない」と思われがちですが、確かな形で社会とつながった瞬間でした。まだ実現できていませんが、いつか必ず形にしたいと思っています。

オトフェス 2025



『声で遊んでみよう』(オトフェス 2025)
日常的に耳にする声や音を加工して、音声の特徴を体感するという展示。参加者は、マイクを使ってその面白さを体験することができる。



『合奏タイム』(オトフェス 2025)
ワークショップで制作した楽器を持ちよって、音大生のリードによる参加者全員の即興演奏。個々の音づくりが、みんなの共鳴に広がった瞬間。

Oosをきっかけに世界へ!

最近、「うま確」という言葉を知りました。「見た目からして絶対に美味しいと確定しているもの」を指すのだそうです。音楽の分野にも、「うま確」を求めるリスナーは間違いなく存在します。ただ、そうした「絶対に良いと分かっている音楽」は、きつと学習能力の高いAIがすぐに作れるようにな

るでしょう。であれば、私たち人間、特に音大で学ぶ若者たちの役割は、まだ世の中に出ていない未知の音のアイデアをどんどん生み出し、世に送り出すことなのではないかと思っています。そして、「なんだこれは!?!」と驚かされるような新しいものに、柔軟に対応し楽しめる社会を作っていくこと。それこそが、これからの私たちの役割の一つなのかもしれません。オトフェスは、まさにそんな旬の「なんだこれは!?!」を体験できる素晴らしい場所です。

さて、2025年に開催した学生2名は、今年、大学で新設される「海外に通用するクリエイター育成プログラム」の受講生になりました。これから彼らは、社会・音楽・テクノロジーの結びつきをさらに突き詰め、世界に向けて新たな発信をしていくことになりました。私も教員として、彼らと一緒にこの未知の道を開拓していくつもりです。実は、彼らがこうした作品を世に出したのは、オトフェスが初めてのことでした。ここでの展示を原点に、ゆくゆくは海外の国際的なアートフェスティバルなどで作品を披露する日が来るかもしれません。

文京区のオトフェスから、世界へ……!彼らの未来が楽しみです。



紙芝居と絵本のおはなし会 2026.3.12 右上は、編集部の特原朋美さん



紙芝居と 絵本の体験を こどもたちへ！

紙芝居は日本生まれの文化

童心社は、文京区千石にある紙芝居とこどもの本の出版社です。社名は「存じなくても、絵本の『いないいないばあ』（松谷みよ子 ぶん 瀬川康男 え）や、『おしいれのぼうけん』（ふるたたるひ・たばたせいいち さく）、「14ひきのシリーズ」（いわむらかずお さく）など、作品に触れてくださったことはあるかもしれません。そして、紙芝居です。紙芝居は知っているよ、という方が多いと思います。が、紙芝居が実は日本生まれの文化であること、今も新刊が毎月刊行されていることはご存じでしょうか。童心社はそんな数少ない紙芝居出版社でもあります。私はここで読者の皆様に、作品について、童心社の人や仕事につ



(株)童心社 (千石)
Hanajima Fumina

花島文奈



花島文奈
2006年に販売部所属の営業職として(株)童心社に入社。2015年より同部広告宣伝グループに所属し、自社メディアの構築、発信活動や広報活動に取り組む。2025年5月より取締役。同年9月より広報プロモーション部部長として、社内外のコミュニケーション全般を担っている。社内の部署横断組織「紙PRO」のメンバーとして、講座の企画運営や、紙芝居の魅力を広めていくための広報活動も行っている。文京区在住。

いて伝える広報の仕事をしています。童心社が文京区に引越（私が入社した年でした！）をしてきてから今年で20年。ここ数年は、Oosで何度か紙芝居と絵本のおはなし会や、展示をする機会に恵まれました。出版社の人間というのは、制作途中の紙芝居や絵本を見てもらおうと、保育現場などこどもたちがいるところへ出かけていくことはありますが、できあがった作品をこどもたちが楽しむ様子を実際に見たり、お母さんやお父さんのお声を直接聞いたりすることはなかなかないものです。Oosのイベントは、それができるとても貴重なチャンスなのです！紙芝居舞台の扉を開くときから、じーっと見つめている子。前まで出てきて、画面を一生懸命指さしてくれる子。お母さんのおひざの上で、心地よさそうに絵本を読んでもらっている子。紙芝居も、特に幼い子に向けた絵本も、ただ置いてあるだ

けではその魅力があらわれてきません。だれかに演じてもらって、読んでもらってはじめて、作品の楽しさやこどもの心に届くのです。だれかと楽しんだ体験そのものがあたたかな思い出となって、こどもたちのその後の支えになるのではないかと、私は思っています。

童心社にもあそびに来てください

童心社の4Fには、宇宙でただひとつの「KAMISHIBAIHAL」があります。ここでは2か月に1度、紙芝居のおはなし会を行っています。ご予約不要、ご参加無料、お出入り自由のゆるやかな会です。広報という私の仕事においては難しさ、ともいえることなのですが、紙芝居の本当の楽しさ、本当の魅力をお伝えするには、体験していただくのが一番！ぜひぜひ、おはなし会に遊びに来てください。



『オカピぼうやの ちいさなぼうけん』～読み聞かせとアフリカ音楽～（語り：岸本真理子）2024.12.14



マジックと音楽と絵本のコンサート（出演：大友剛）2025.12.7



Sato Riki
佐藤力



佐藤力
絵本・児童書編集者。文京区小石川にある出版社、(株)ひさかたチャイルドに勤務。タンザニアのトラディショナルな音楽を演奏するグループ、ムジャンジャに参加し、親子劇場やダンスワークショップなどで太鼓の演奏活動をした経験を持つ。現在は編集者として絵本づくりに携わりながら、アーティストと音楽でコラボレーションする活動を続けている。

編集者も読者と 出会いたい

(株)ひさかたチャイルド (小石川)

音楽と絵本のコンサート

♪ジャジャーン
ジャンジャンジャン♪
勢いよくピアノの音が響き渡る。僕はそれを合図に、カホーン（太鼓）を打ち鳴らす。
♪ドゥツタツタドゥツドゥツタツ♪
リズムがピタリと重なれば、おのずとグルーブ感が生まれ、会場に上げ上げテンションが発生。オーディエンスのこどもたちが、元氣よく歌い出す。
♪しろいくつ かなりさいこう！♪
ああ、こんなに楽しい時間がずっと続いてほしい。こんなことを願う僕の

職業は、当然ミュージシャン……ではなく、実は絵本の編集者である。ここは、Oos。絵本の翻訳者であり、ミュージシャンとしても活躍する大友剛さんの読み聞かせイベントの真っ最中だ。大友剛さんの絵本イベントは、手品あり、音楽あり、絵本ありの盛りだくさん。全国各地で大人気のイベントだ。僕は、元々音楽が大好きということもあって、大友さんがイベントで『ねこのびと』の読み聞かせをする際に、カホーンの演奏者として舞台上立つことが時々ある。本来、編集者の仕事は裏方なので、表に出て楽器まで演奏す

る必要はないのだが、ときには作品を届けるところまで関わりたいと思っている。最近ではXやNoteで名前を出して文章を書く編集者も増え、元来の職域にとられない活動が本を知ってもらうためには必要だと言われて久しいのだが、僕はSNSがからきし駄目でも、数のうえで圧倒的に劣勢なリアルイベントに動いている。僕の場合、こどもたちと一緒に歌えることがそもそも楽しい。そして、こどもたちの生の反応を体感できるのもとても貴重な体験だ。著者はもちろんだが、編集者も自分が携わった作品がどんなふう読者に届いているかというのとはとても気になるところで、楽しんでる表情を見たり、一緒に歌ったりできたという事実は、作家・翻訳者と一緒に、また面白い絵本を作っていること、次の作品への活力が得られる瞬間でもある。



Oosイベント一覧（令和7年度後期）



10/2（木）、12/11（木）、2/12（木）

●【アリス館連携】絵本の読み聞かせとおもちゃ作り！

▶アリス館

絵本の読み聞かせと簡単なおもちゃづくりを通して、親子でゆったり過ごす時間に。継続的な開催の中で顔なじみも増え、「また来たい」という声生まれる、地域の顔の見える場となっています。



10/24（金）

●【mTALK VOL.11】街を元気に!でんでん太鼓と学生たちの挑戦!

▶清水大介（居酒屋でんでん太鼓）、中央大学の学生

学生と地域が交差する実践のリアルを共有するトークイベント。

学生の活動に対する思いや、地域側の本音も交わされ、双方にとって気づきのある時間となりました。



11/8（土）

●【海外大学入門講座】留学へのはじめの一步「海外留学のリアルを知ろう!」

▶NPO 法人みんなの進路委員会、文京区出身で海外留学中の大学生

留学中の学生による進路選択の背景や制度を紹介する講座。

子どもから保護者まで、留学へのイメージを具体的に描ききっかけとなりました。



11/24（月休）

●文京クラフトフェスティバル（クラフェス）2025

▶もくもくはりねずみ、ラフルール、Nijirosketch、新里碧 など

文京区内外のアトリエで創作活動をしている9名の多様な作家によるものづくり体験。

体験をきっかけに興味を広がり、まちとの関わりが少しずつ広がっていきました。



12/7（日）

●【ひさかたチャイルド連携企画】マジックと音楽と絵本のコンサート

▶大友剛（ミュージシャン&マジシャン&翻訳家）、佐藤力（ひさかたチャイルド編集長）

音楽とマジックと絵本が融合した親子向けコンサート。

ねこのピートの翻訳者と編集者のコラボは、大人も思わず引き込まれる内容で、会場に一体感が生まれ、笑顔が広がるあたたかな時間となりました。



12/20（土）

●【岩崎弘記念文京ジュニア吹奏楽団連携企画】クリスマスコンサート

～やってみよう、さわってみよう～

▶岩崎弘記念文京ジュニア吹奏楽団、中村冬威

演奏と楽器体験を通して音楽の楽しさに触れるクリスマスコンサート。世代を超えて楽しむ姿が見られ、音楽をきっかけに交流が広がる時間となりました。



12/21（日）

●【日本女子大学学生連携企画】つくってあそぼうクリスマス工房

▶日本女子大学社会連携教育センター公認、家政学部児童学科有志学生企画

子どもの発達に合わせた遊びを取り入れた体験型ワークショップ。

子どもたちが夢中になる姿が見られ、保護者同士の交流も自然に生まれる時間となりました。



1/18（日）

●【アートスイッチプロジェクト連携企画】親子で楽しむヴァイオリン〜ヴァイオリンってなあに?〜

▶南條由紀（ヴァイオリニスト）

生演奏や楽器の仕組みに触れながら音楽の楽しさを体験する親子向け企画。初めての体験に目を輝かせる子どもたちの姿が見られ、保護者にも好評な時間となりました。



2/8（日）

●【こぐま社連携企画】世代を超えて読み継がれる絵本をめざして

～「こぐまちゃんえほん」「11 びきのねこ」シリーズを中心に

▶関谷裕子（元こぐま社 編集長）

人気絵本シリーズの誕生背景や制作秘話を語るトークイベント。絵本に込められた想いや価値に触れ、世代を超えて読み継がれる魅力を改めて感じる時間となりました。



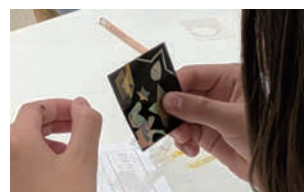
2/23（月・祝）

●【小石川・目白台図書館連携企画】児童文学作家といっしょに物語をつくるワークショップと絵本の講演会

▶はらまさかず（作家、編集者）、小石川・目白台図書館

児童文学作家とともに物語づくりの楽しさに触れるワークショップと講演会。

子どもから大人まで、それぞれの形で表現する楽しさが広がる時間となりました。



3/7（土）

●【お茶の水女子大学学生連携企画】偏光板で錯覚アートを作ろう!

▶お茶の水女子大学サイエンスコミュニケーション団体 おちゃっこ Lab.

偏光板の性質を活かして光で色が変わるアート制作を楽しむワークショップ。

子どもたちの驚きと発見が広がり、学びと楽しさが重なる時間となりました。



3/12（木）

●【童心社連携企画】紙芝居と絵本のおはなし会

▶童心社

0～2歳の子ども向けに紙芝居と絵本を楽しむ読み聞かせの時間。

制作の背景や楽しみ方にも触れながら、親子でゆったりと過ごすひとときとなりました。



3/15（日）

●【Oos企画】踊りを通じた地域交流～郡上おどり～ 踊り練習会

▶郡上おどりサロン in 文京千石

郡上おどりを通して気軽に楽しめる体験型の交流企画。

初めての輪に入って楽しむ姿が見られ、自然な会話や交流がゆるやかに広がる時間となりました。



3/15（日）

●【mTALK VOL.12】食からひらく、まちの話

▶菊川隼人（キクヤ店主）、長谷川大（認定NPO法人街ing本郷代表理事、魚よし店主）

食を通じた店主と地域の関わりをテーマにしたトークイベント。

日々の営みの中で生まれた思いや実践に触れ、これからの地域との関わりを見つめる時間となりました。

3/27（金）～3/29（日） ● 第7回 クッキーと桜めぐり ▶茗荷谷界隈プロジェクト

まちのお店を巡りながら楽しむスタンプラリー企画に景品交換所として参画。

新しいお店やスポットとの出会いが生まれ、まちとつながるきっかけが広がりました。



Oos

MAGAZINE EPISODE.3

私語は禁止です



2026年3月31日発行

発行：大塚地域活動センター オープンスペース企画事務局
(運営：図書館流通センター / Myogadani Lab.)

E-mail: otsukaop@gmail.com

制作：Myogadani Lab.

Oos住所：文京区大塚 1-4-1 中央大学 茗荷谷キャンパス 2階

